



清輔奥儀抄 四



都留文科大学附属図書館所蔵

後撰集 奥義抄中之中 繹

春

一

やうをかくものもあらむうちさう
もあまよひのとだくうつきめう
あらきうとせんとくちあらえのあら夜
とあらう紙御とれあらうとくらえ
あらうとくらえのあらうとくらえ
おうあらう也 集云
ウタヒのはすむけふん
あらう紙むりとくらえよ

毛と角とあとはうかれあらの、角と毛
をもとからぬれぬもよきとてすまう云
せれりやあらのちわねじりとれら
くゆくゆれられしもひあら

毛と角とあはれの、角と毛とあらの云
あぬうとく取物れ具とあらゆまくと
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

二

毛と角とあはれの、角と毛とあらの云

ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

比叡山とあら手とく縁とあらひま
ふと見は見化すとがる推古天皇と
経と紀あよきるとあらゆまくと
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

三

毛と角とあはれの、角と毛とあらの云

の柔いや人のよゆくと
くよしと緑と翠眉媚黛とくほくと
すもとゆよつてうりれすもよきと

あら氣輔御スケシタチノ云

あら風アラフウをめまゆるは風アラハラと風アラハラ
もうの風アラハラは風アラハラすと風アラハラ

裏

四

あひきれ山アヒキレスヤマをあひのゆアヒヌがひ
えのねさんエノネサンよすくヨスクてテアリアリ
毛アシ人のアシヒトとトてテアリアリ水アシのアシ流アシル
水曲アシカツとトあアわアハきアシキとトあアハくアシクとトあアハくアシク
アシアシくアシクとトせセくシクよヨくクとトえエくシク
水アシ謂アシテとトいイ謂アシテもモくク

五

あひきアヒキをもモあアハくアシクなナ行アシガ
まマくマクとトれレりリくクくク
あア手アシのアシはハアアひヒくクひヒくクもモあアハ
きキしシとトこコのノとト見ミくクかカひヒくクとトあアハ
きキのノとトひヒとトアア見ミくクまマくクとトあアハ
とトひヒとトあアハじジとトよヨばバ川カワ
のノ見ミくクれレくクよヨうウひヒとトあアハ
もモや

六 わワのノとトひヒとトよヨまマくク
わワよヨのノとトひヒとトよヨまマくク

月のうきよめあまゆきあまゆきと
めりととととせひきとれ日とみる

八月と朝カタマリととてせひきと

七 えひきうじうこのはるあまゆき

月のうきよめあまゆきと

月のうきよめあまゆきと月のうき
くくくととくのねあさとくとくとくと
さきハ秋とアキモ神ハ秋のけんとち
裏着遊勘紫義うきよめあまゆきと思
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

ほのいのうのうのうのうのうのうの
うのうのうのうのうのうのうのうの
うのうのうのうのうのうのうのうの
うのうのうのうのうのうのうのうの
うのうのうのうのうのうのうのうの
うのうのうのうのうのうのうのうの

秋

八

えひきうじうこのはるあまゆきと
うのうのうのうのうのうのうのうの
うのうのうのうのうのうのうのうの
うのうのうのうのうのうのうのうの
うのうのうのうのうのうのうのうの

あくまき

九 車馬走はのをもつてのま
ト走りあやとてうれうまの車
走りあやとてあ馬とてのまの車とての車
あやとてあやとての車とての車とての車

十 鹿野をとて野をとての車とての車とての車
がとての車とての車とての車とての車とての車
とての車とての車とての車とての車とての車

あひなうといあひなうとい

とての車とての車とての車とての車とての車
とての車とての車とての車とての車とての車とての車

集云

十一 られとての車とての車とての車とての車とての車
とての車とての車とての車とての車とての車とての車

十二 リリとての車とての車とての車とての車とての車
とての車とての車とての車とての車とての車とての車

はひのくわせしれしれしれしれしれ
きへお今よけりうきへひとくまへ

一のきあらわすれりうきへひとくま
舞とおひくよ

士 やくわゆりのうじるく

うきねりのうの花

是ハおはなゆきしとひもちゆんわ
う花へりをとれくとまくめくみじれ
きさくあおきはくとよめくおおむかくと
ゆるくまきのうめうてよる

士

やくわゆりのうの花をのせ

わのうめうとけうとせりえ

是ハおひくよけりうきへひとくま
じかひくよけりうきへひとくま
ふとあるうめうとけうとけうとけうと
てのうめうとけうとけうとけうとけうと
くよくよけりうきへひとくま
あおむかくまくまくまくまくまくまく
又おのうめうとけうとけうとけうとけう

士

用の事とわざの事の事はあつて
まづの事とあらわす事がある

そ なまくさかのつむぎの
月へておもひのこゑをつむぎ

勧めどあらわす事の事はあらわす事
そあらわす事の事はあらわす事
ほんじの事とおもひの事

大 おもひの事とおもひの事
ゆく事とおもひの事
おもひの事とおもひの事とおも
おもひの事とおもひの事とおもひの事
おもひの事とおもひの事とおもひの事
おもひの事とおもひの事とおもひの事
それちうのほんじの事とおもひの事
おもひの事とおもひの事

丸 もへつておひのじいわ あらもね
ヨリハタマハ人よりりんとせんや
ヨリアヒトハタマハ人よりりんとせんや
ヨリハタマハ人よりりんとせんや
ヨリハタマハ人よりりんとせんや

三三

モハタマハ人よりりんとせんや

ニ端送織エダスヂツルウリハ織威物カミモノアリシト成統ナリシトセイテウ

二人の綴織ツヅルツルのびと一人の大神オオジノアリシト成統ナリシトセイテウ

名ハ内ナカニヤヒトハ外スバニハ一人ヒト天神テンジンアリシト成統ナリシトセイテウ
一人ヒト也織アリマツル田タマアリシト成統ナリシトセイテウ
ありヒトハ内ナカニ也織アリマツル田タマアリシト成統ナリシトセイテウ
内ナカニ也織アリマツル田タマアリシト成統ナリシトセイテウ
内ナカニ也織アリマツル田タマアリシト成統ナリシトセイテウ

一 まきとぬくはゆきのゆきさん
ゆきとぬくはゆきのゆきさん

三三

とまくとみ節不そてんのとまくとみ節の節
也やりとひ五節すく忌大忌とひまれ
あまくよあいわうんとい忌とひまくぬ
人とも大忌とひもとひもとひもとひも

へくよの

廿

ほのまつゆのあひをくまくまく

とくしめくひのまくまくまく

ちよだじと紙打てもよううに
よきのまくひとくひとくあまくまくかきよ

もくまくと紀の紙打てもよううのまく
まくとまくとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくと

三

まのあきとあきとあきとあきとあき

とあきとあきとあきとあきとあき

あきとあきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきと
あきとあきとあきとあきとあきとあきと

あきとあきとあきとあきとあきとあきと

廿

ほのまつゆのまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまく

かうの御事の藤本とて案を
とだらうまくあつてゆきのうへひ
のうれりあらうてあらうとて
うちがうすのとておもむかく
とておもむかくとておもむかくとて
おもむかくとておもむかくとて

おもむかくとておもむかくとて

おもむかくとておもむかくとて

おもむかくとておもむかくとて

とておもむかくとておもむかくとて

とておもむかくとておもむかくとて

とておもむかくとておもむかくとて

とておもむかくとておもむかくとて

とておもむかくとておもむかくとて

五

おもむかくとておもむかくとて

おもむかくとておもむかくとて

おもむかくとておもむかくとて

おもむかくとておもむかくとて

とよあらわくあらわくあらわくあらわく
あらわくあらわくあらわくあらわくあらわく
あらわくあらわくあらわくあらわくあらわく
あらわくあらわくあらわくあらわくあらわく

共

日記

日記

共

もはばれへとほきよ見よと
よあらわくひへとよあらわく

けどもむかうられほくとくのまく
うながおひをみのくとくうよむちま
くひとのはくとくくとくうよむ
くとくうよむのとくとくくとくうよ
共 ひあらわくのあらわくあらわくあらわく
あらわくあらわくあらわくあらわく

あらわくあらわくあらわくあらわく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

蒙古文手稿

久留米の城
久留米の城
久留米の城

まことに御心地の如きは御心地の如き
おもむかしくてこそある在寓の處

九

但假るのくそおれをあまふ事等
心をもつてひきかへせどりのハ
アと云ふもあらへん
せと云ふは語するに足りぬもの有る
まい誰ともあらずと云ふの如きも心ひ
まれずと云ふもの

辛志翁之子海翁之子也。有
子曰子固。與其兄子曰子瞻。同
游於赤壁。賦成。子瞻題其石。有
子曰子瞻。與其兄子曰子瞻。同
游於赤壁。賦成。子瞻題其石。有

ゆきと雪争うてよかと
此一いは風ひのちむくぬわざ

花馬か道とひるのあまし
管絃大鳥よな絃まくよゆをそ

ゆきと雪争うてよかと

花馬か道とひるのあまし
管絃大鳥よな絃まくよゆをそ

花馬か道とひるのあまし
管絃大鳥よな絃まくよゆをそ

集云

あくらむよけひよすくねがよ
あくらむよけひよすくねがよ
又思考もすよもよすよもよすよ
もよすよもよすよもよすよもよ

雜

花馬か道とひるのあまし
管絃大鳥よな絃まくよゆをそ
とよかきとよかきとよかきとよか

うらわすにあはれむとて
西 こゑのとよみのゆゑのゆゑのゆゑ

月と夜と月と夜と月と夜と

並

絶のうひひひひひひひひ
まかたのうひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひ
ひひひひひひひひひひひ

思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ
思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ
思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ
思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ
思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ思ひ

並

あいひひひひひひひひひ
あいひひひひひひひひひ

並

もひひひひひひひひひ
もひひひひひひひひひ
もひひひひひひひひひ
もひひひひひひひひひ
もひひひひひひひひひ

並

七

阿爾巴尼亞人之多也。其勢力既

وَمِنْهُمْ مَنْ يَرْجُوا أَنْ يُخْلِدَهُمْ فِي الْأَرْضِ

通志稿卷之三十一

わの雄略天皇の時す丹波國余村郡より
御鴻の子と云ふ者をりきにゆうかめとづける
タカヒコ

毛毛女卦

مَنْ يَعْلَمُ مَا فِي الْأَرْضِ إِلَّا هُوَ

うりみねんがよひとあとのうきへゆく

وَلِمَنْدَلْتَ وَلِمَنْدَلْتَ

梵
抄ひまかくらう・経とめ

蒙古文

卷之三

九

まくらのまへにあそぶ

之通川縣明鈞臣所作

九陰散丸

除名れんとわのりは中納言のま
も官位とてかく候る事無し
道をとむにあきらめに除名れんと
しゆくとてかく候る事無し
まことひのをかかへりあくまかの海
よゑ人あまくらてかくあくまとてかくのう
よゑにかかへりあくまとてかくのう
うきこゑのうかかへりあくまとてかくのう
あくまとてかくのうかかへりあくまとてかくのう
のうかかへりあくまとてかくのう
うきこゑのうかかへりあくまとてかくのう
よゑ人あまくらてかくあくまとてかくのう
よゑにかかへりあくまとてかくのう
早 みつまくとてかくのうとてかくのう
よのうとてかくのうとてかくのう
せ年れ道よ延び御時行の行者よみと
うかくとあひ音ひくとてかくとてかく
うかくか野のうかくや或人云延

トシモカアテ御事と申す。桃杞太陽御事アリ
トシモカアテ御事と申す。但義長御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ

一 何をされ候事の事ありサマニ

アリタリトシモカアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ

神アリタリトシモカアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ

二 何をされ候事の事ありサマニ

アリタリトシモカアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ

神アリタリトシモカアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ

三 何をされ候事の事ありサマニ

アリタリトシモカアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ

神アリタリトシモカアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ
カアテ御事と申す。大吉の御事アリトシモ

四 何をされ候事の事ありサマニ

三十四

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛
毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

三十五

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

三十六

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

三十七

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

三十八

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

三十九

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

四十

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

四十一

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

四十二

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

四十三

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

四十四

毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

あらぬ人間の事とおもひをよしにせし
はまくまくかくまくとおもひをゆきゆけ松
しらわのあそにへりとあた御御前元徳と
ひきの任よそうさまよつてかくひく
わくらのうれ節へうけよまとひよ
うひのんわくひれあるばくく瀬内ひ
くすくまじきのれの松もみの草之方

たけまくらむすくまくらむすくまくら

あらぬ人の事とおもひをよしにせし

程のくわくり不^{ハシマリ}能^{ハシマリ}く深瀬冲^{ハシマリ}傳^{ハシマリ}す又^{ハシマリ}の
まくはくせんと橋道身^{ハシマリ}傳^{ハシマリ}す又^{ハシマリ}は
卷^{ハシマリ}義^{ハシマリ}もく橋^{ハシマリ}よほすとめらきよもく

聲

こゑのこゑのまゆはうだぬなり

ひをとひるやの歎^{ハシマリ}とあそびくみのまよ
ひをとひるやの歎^{ハシマリ}とあそびくみのまよ
百葉とかまくつとむとむ又百代當とまよ

とあらざることある

也 今、そとひきりてとづらま

ありよおのへとづらめど
こきらんのりのまことをゆめまつる
くのうひくはるのりよわくも
のううぶるくわのうれひづく
すくさわゆるわゆるやの或物すに都
督へもくとめ異着へとゆ
ちうとめの女刀自とてわのうよとくの
うちせれ懸若と日が記よふくとくの
水自のうしあくく

別

梵
もくまくまくのりとせれり
もくまくまくとくまく
もしれぬよのひととわくとくまく
くあらやくもくとくまく
まくまくねるか年のかくとくまく
一もくまくひくまくとくまく
もくまくとくまくとくまくとくまく

是れしととくらんと云ふと云ふて但ちやう
の義を、うわゆると云ふやう又貴之奇云
とくらんをひき使とひつておも
かくらんとくらんとくらん

賀

先
ややうくらんはれぬの、まかう
もやうくらんきうちれりアス
もやうくらんや、たぶらかすな原野の社
のまよとくらんとくらんとくらんとくらん
氏の、まよとくらんとくらんとくらん

